

茶樹黄化さし木法の実用化

— 第6報 アツサム雑種の黄化および緑化期間について —

讃井 元・安間 舜・松下 繁

(農林省茶業試験場) (農林省茶業試験場枕崎支場)

1 結 言

従来アツサム種およびアツサム雑種のさし木発根は、日本種および中国種にくらべきわめて劣るといわれている。

筆者等が昭和35年および36年にアツサム雑種について調査した結果、適期と云われる6月さして、さし木後1カ月で16%、2カ月で50~60%、3カ月で90%の発根率が示され、緑茶樹にくらべきわめて発根不良で根量も少ないことが認められた。

この遅発根性がアツサム雑種の優良品種紅茶の急速な増植および育種年限短縮の大きな障害になっている。

筆者等は昭和29年以来緑茶樹のビニール被覆による黄化さし木法を研究してひめおどりの難発根性を解決し、又やぶきたでさし木後1カ月で第1回の根群形成を終了させ、さらに施肥とジベレリンの併用によって6カ月後には樹高25cmに達する健苗の育成に成功した。これら黄化処理の効果がアツサム雑種に認められるならば、優良品種の普及もきわめて容易となり、さらに発根後の生育期間の長い暖地ではさし木年内に健苗が獲得できる。これらの観点からアツサム雑種に対する黄化処理の効果について若干の調査を行ったので報告する。

2 材料および方法

実験Ⅰ 秋さしにおける黄化処理

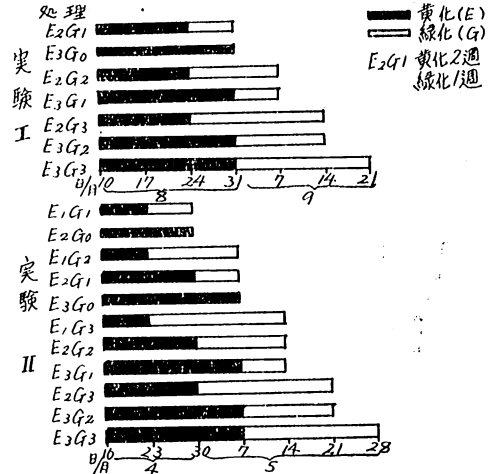
供試品種は6年生のべにかおりで黄化処理開始は8月10日(第1図参照)、黄化は摘採面上45cmに黒ビニールのトンネル式被覆によった。さし穂調製後0.02% N・A・A水溶液に24時間基部浸漬し切返しを行ないさし木した。

試験区は1区30本の3反復とし、掘取りはさし木後40日目に行なつた。

実験Ⅱ 春さしにおける黄化処理

供試品種、黄化処理の方法およびN・A・A処理の方法は実験Ⅰと同様で、黄化処理は4月16日開始し(第

第1図 試験区分一覧表



1図参照)、掘取りはさし木50日目に行つた。

3 調査成績および考察

実験Ⅰ 秋さしにおける黄化処理の成績は第1表に示される。

第1表 秋さしにおける掘取調査成績

調査項目	調査成績					
	発根率	新梢長	新葉数	根長	根数	二次根
8月31日さし						
対 照	44.4	0.69	0.14	0.60	3.3	5.5
E2G1	57.5	0.56	0.03	1.25	7.6	17.7
E3G0	25.5	0.68	0.16	0.25	1.0	2.2
9月7日さし						
対 照	36.6	0.81	0.14	0.22	0.8	1.1
E2G2	73.2	0.62	0.10	1.09	3.2	14.4
E3G1	37.8	0.52	0.11	0.59	2.2	12.9
9月14日さし						
対 照	25.5	0.88	0.24	0.06	1.3	1.2
E2G3	39.9	0.64	0.10	0.24	1.8	2.2
E3G2	35.5	0.75	0.14	0.34	1.8	1.2
9月21日さし						
対 照	15.5	0.53	0.08	0.09	0.5	0
E3G3	23.3	0.63	0.15	0.46	1.7	0

発根率：さし木時期の異なる4対照区をみると、早くさすものほど発根率は高いが緑茶樹にくらべるといじむしく劣ることがうかがわれる。黄化処理区はE3G0を除き、いずれも標準より高く、明らかに発根が促進される事が認められた。しかし50%以上発根す

るのは E_2G_1 , E_2G_2 のみで黄化期間+緑化期間が5～6週では発根率が劣った。これは気温の低下によるものと考えられ、秋の黄化処理では温度が低下する以前にさし木する事が必要であろう。

地上部：新梢長および新葉数は黄化処理区でおとり初期生育が抑制される傾向が認められた。

地下部：4対照区をみると発根率と同様早くさすほど根長も大で根数も多い。黄化処理区は E_3G_0 を除きすべて標準よりすぐれ、明らかに発根促進効果が認められた。

今後さらに光線←遮断の程度および被覆時期について検討を加え、又ビニール被覆による無かん水さし木法等を併用するならば、秋さしにおける短期育苗も可能と思われる。

実験Ⅱ春さしにおける黄化処理の成績は第2表に示される。

第2表 春さしにおける掘取調査成績

処 理	項 目					
	生存率	発根率	新梢長	根長	根数	二次根
	%	%	cm	cm		%
E_1G_1	43.3	29.9	0.42	2.51	8.3	18.8
E_2G_0	0	0	0	0	0	0
E_1G_2	98.8	71.0	0.47	4.17	17.4	52.2
E_2G_1	92.1	73.3	0.46	2.72	12.1	34.4
E_3G_0	13.4	7.7	0.56	0.43	3.2	0
E_1G_3	100.0	92.2	0.91	5.06	20.9	79.9
E_2G_2	98.8	86.6	0.75	4.60	19.8	66.6
E_3G_1	98.8	78.8	0.71	4.89	19.8	67.7
E_2G_3	100.0	88.8	0.69	5.52	20.7	81.0
E_3G_2	100.0	85.5	0.84	4.17	14.3	78.8
E_3G_3	100.0	95.5	0.80	4.94	23.5	75.5

発根率：Tuhey の群別によると4群に分けられる。

第1群には E_3G_3 , E_1G_3 , E_2G_2 および E_3G_2 等の比較的長期間処理区がふくまれ発根率が最も高く、第2群の E_3G_1 , E_2G_1 および E_1G_2 がこれにつき、 E_3G_0 および E_2G_0 の無緑化区はほとんど枯死した。

常法では2カ月で50～60%、3カ月で90%の発根率

が見られるが、黄化処理法では50日目で上述の成績が得られ E_3G_3 では2～3カ月の発根促進となつた。

地上部：新梢長は処理が長期におよぶほど成育もよい傾向が認められた。緑茶樹の黄化処理では1カ月の掘取りで根の多いものは新梢長が短い、その後の生育は根の多いものほど旺盛であることが認められている。

本成績は50日後の掘取り調査の結果で、すでに大部分が第1回の根群形成を終了し、地上部の生育を開始していることを示している。

地下部：根長および根数ともに黄化期間の比較的長い区がすぐれ、緑化なしの区が不良で、一般に黄化期間+緑化期間が4週間以上のものが伸育良好であった。

二次根についても根長および根数とほとんど同じ傾向が示され、6月下旬～7月上旬で常法さし木の年内の伸長量に達していることが認められた。

以上の結果から、春さして黄化期間+緑化期間が4週間以上のものに7月～11月の成育期間で適切な管理を施せば、年内に充分定植可能苗を得ることができると思われる。

4 む す び

これらの結果から秋、春ともアツサム雑種に対する黄化処理はきわめて効果的で、秋さしでは8月下旬～9月上旬までさし木を行なうのがよく、春さしでは黄化および緑化期間それぞれ2～3週間の組合せが効果的であつた。

今後秋さしでは被覆の時期および程度について、春さしでは施肥とジベレリンの組合せについて、研究を推進するならば、紅茶園の急速な造成および育種年限短縮に資するところが大きいと考えられる。